

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520577

研究課題名(和文) 関連性理論に基づいた日・英語のイディオム解釈に関する認知的研究

研究課題名(英文) Relevance-theoretic analysis of idioms

研究代表者

井門 亮 (Ido, Ryo)

群馬大学・社会情報学部・准教授

研究者番号：90334086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：関連性理論の最近の研究では、発話解釈と同様に、語解釈の際にも推論がかかわると主張している。つまり、関連性の原理に制約された推論プロセスを通して、聞き手は符号化された語の概念を調整し、解釈を行うと考えるのである。この語用論的プロセスは「アドホック概念構築」と呼ばれ、発話の明示的意味の分析に加え、メタファーなどの修辭的表現の解釈についても、アドホック概念の観点から活発な議論が展開されている。本研究では、本来は語レベルでの解釈を説明するために提案されたアドホック概念が、さらに大きな単位である句レベルでの解釈にも適用できるのか、イディオムを通して検討を行い、さらに今後の検討課題についても言及した。

研究成果の概要(英文)：Recent approach to lexical pragmatics within the framework of relevance theory claims that the concept linguistically encoded by word may be pragmatically adjusted (i.e. lexical broadening, narrowing or attributive use) and constructs ad hoc concept as a part of the pragmatic process of interpreting the speaker's intended meaning. This inferential process which is guided by the principle of relevance is called ad hoc concept construction. It sheds new lights not only on the recovery of the explicature of the utterance, but also on the understanding of figures of speech such as metaphor. In this research, we take this idea of ad hoc concept one step further by expanding its applicable scope from word level to phrase level, and argue that during the comprehension process of utterance containing an idiom, ad hoc concept is constructed at phrase level. And we make some suggestions for further research on idioms using the framework of ad hoc concept.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：イディオム アドホック概念 関連性理論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の基盤となるスペルベルとウィルソンらを中心とする関連性理論の枠組みでは、国内・国外を問わず「語彙語用論」と呼ばれる分野が注目を浴びている。そこではこれまでの主な分析対象であった発話解釈の場合と同様に、語彙解釈の際にも関連性の原理に基づいた推論が行われるとし、符号化された語彙概念がコンテキストに応じて語用論的に調整されて、その場限りの概念を構築するという主張がなされている。

「アドホック概念構築」と呼ばれるその語用論的な推論プロセスは、発話によって符号化された語彙概念を「緩めて」解釈する場合(語彙的拡張)と、「狭めて」解釈する場合(語彙的縮小)の2つに大きく分類され、さらにアドホック概念が「転嫁的」に用いられる事例も指摘されている。

このアドホック概念構築の観点から、メタファーなどの修辭的表現の再分析のみならず、発話の明示的意味の復元に関係する、語彙概念の語用論的解釈についても活発な議論が行われている。

(2) 本研究も関連性理論におけるこの語彙語用論の枠組みに基づいて進められるが、これまでの語彙語用論やアドホック概念の主要な分析対象であった「語レベル」での現象を、イディオムといった「句レベル」での現象にまで拡大するものである。

さらに本研究では、これまでのイディオム分析で提案されてきた「分解可能性」といった概念と、アドホック概念構築を中心とした語用論的分析との融合を図る。

(3) 理論的な側面の準備段階として、本研究の申請前に、関連性理論における語彙概念の解釈に関する議論の概要をまとめ、さらにアドホック概念としての解釈を促す日・英語の接尾辞について、その分析の可能性を探ってきた。

これらの関連性理論に基づいた語彙解釈に関する一連の研究を通して、これまで主に「語レベル」での語用論的解釈の説明に対して適用されてきたアドホック概念構築という推論的な作業が、イディオムなどの「句レベル」での解釈の説明についても適用できるのではないだろうか、もし適用が可能であれば、どのような形でイディオムの解釈にかかわっているのだろうかといった疑問が生じ、本研究の着想に至ったのである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、日・英語のイディオム解釈の仕組みについて、関連性理論の観点から認知的分析を試みることにある。そして、字義通りの意味から離れたイディオムの意味が、聞き手によっていかに解釈されるのか、またその解釈過程において、関連性理論で提案されている「アドホック概念構築」の作業

がどのようにかかわっているのかについて検討する。

(2) また、これまでのイディオムに関する先行研究での議論も踏まえ、そこで指摘されているイディオムの「分解可能性」といった概念が、どのようにイディオムの語用論的解釈に影響を与えているのか分析を行う。そしてこれまでの意味論的・統語論的分析と、解釈の側面に重きを置く語用論的分析との融合の可能性を探る。

(3) さらに日・英語2言語間でのイディオム解釈過程の共通点や差異についても明らかにしていく。そして日・英語間でイディオムの解釈過程に共通点や差異があれば、それらが何に起因しているのか検討を行う。

## 3. 研究の方法

(1) まず、本研究の研究目標を達成するための準備段階として、語用論を中心としたイディオムに関する先行研究の確認と研究調査を行い、それらの問題点や反例などを確認した上で、本研究の理論的基盤を構築する。

関連性理論におけるこれまでの語彙概念解釈の議論については、本研究の申請前にある程度まとめている。しかし、この分野の研究は現在も急速に発展しているため、最新の研究動向を、先行研究を通して、また国内・国外の関連学会にも積極的に出席することによって確認・研究調査を行う。

さらに、意味論・統語論など言語学の各分野におけるイディオム分析に関する先行研究や最新の言語理論の情報を収集・検討する。そして、それらの分析結果や研究成果を把握した上で、各分析の問題点や反例などを考察する。

以上の準備的研究に基づき、本研究での分析基盤をより最新のものとするとともに、新たな認知的モデル構築のための基礎的な作業を行う。

(2) 次に、本研究の分析対象となる日・英語のイディオムの用例を収集し、これまでの研究で指摘されているイディオムの「分解可能性」の観点から分類を行う。

そこで分類された用例に対して、関連性理論に基づいた語用論的な観点から分析を行い、アドホック概念構築という推論的な作業がその解釈にどのようにかかわっているのか、具体的に考察をしていく。

そして、その語用論的な解釈過程が、「分解可能性」という概念とどのように関係しているのか検討し、イディオム解釈に関する新たな認知的モデルを構築する。

(3) 以上の検討結果を踏まえて、日・英語イディオムの解釈過程に共通点や差異があるかどうか、もし何らかの違いがあるならば、

それらは何に起因しているのかについて、日・英語間での対照研究を行う。

そして、それらの共通点や差異について、日本語と英語のイディオムの言語的な特性や、話者の思考やコンテキストなどといった要因が、いかにイディオムの解釈過程に影響を与えているのか、関連性理論に基づいて認知的な観点から考察する。

(4)最後に本研究のまとめとして、研究成果を学術論文や学会発表などを通して公表する。

#### 4. 研究成果

(1)研究目的を達成するために、平成23年度は、研究実施計画に沿って、関連性理論とイディオム分析に関する最新の言語理論の確認と研究調査、及びイディオムの解釈過程とアドホック概念との関係を中心に研究を進めた。それと並行して、日・英語のイディオムの用例の収集と分類を行った。

まず、関連性理論とイディオム分析に関する最新の言語理論の確認と研究調査、及びイディオムの解釈過程とアドホック概念との関係に関する検討については、岡田 聡宏・井門 亮 (2012)「アドホック概念：仕組みと可能性」松島 正一(編)『ヘルメスたちの饗宴 英語英米文学論文集』661-695, 東京：音羽書房鶴見書店、及び、井門 亮 (2012)「イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』第10号, 1-15, 学習院大学外国語教育研究センター。の2本の論文にその成果をまとめた。

これらの論文では、まず関連性理論におけるこれまでの語彙概念解釈一般に関する主張と、アドホック概念を援用したイディオム分析の先行研究として、Vega Moreno (2001, 2003, 2005, 2007)での主張を中心に研究概要のまとめを行った。

さらに、Vega Morenoによる分析では説明が困難と思われる日本語のイディオム解釈の事例を指摘し、その代案を提示するとともに、今後の検討課題についても言及した。

日・英語のイディオムの用例収集と分類については、上記の2本の論文を執筆するにあたり、日本語のイディオムの用例を中心に、収集及び分類を行った。

これら平成23年度に行った研究により、関連性の原理に沿ったアドホック概念構築という推論作業が、これまでの分析で明らかにされてきた「語レベル」での解釈を中心に適用されるのではなく、イディオムといった「句レベル」の解釈にも適用できるということが明らかになった。

(2)平成24年度は、前年度の研究から継続してイディオムの解釈過程とアドホック概念との関係について検討を行った。

イディオム解釈の際には、関連性の原理に沿ったアドホック概念構築という推論作業

が、「語レベル」だけで適用されるのではなく、「句レベル」でも適用されるということ平成23年度の研究で明らかにしたが、平成24年度もこの点について引き続き検討するとともに、日本語を中心にイディオムの用例収集、及び分類を行った。そして、イディオムの解釈について、関連性理論で提案されているアドホック概念構築という推論作業がどのようにかかわっているのか、日・英語のイディオムについて具体的な考察を行った。

それらの考察を通して、イディオム解釈の際にアドホック概念の構築がかかわる場合、本研究の申請当初に予想していた「語彙的拡張」だけではなく、「転嫁的用法」としてのアドホック概念が構築される可能性を検討した。

さらに本研究でのイディオムの解釈に重きを置いた語用論的分析に、「分解可能性」といった従来の意味論・統語論的なイディオム分析との融合の可能性を探った。

以上の考察に基づき、アドホック概念構築の観点からイディオム解釈に関する新たな認知的モデルの構築を試み、その成果を研究論文としてまとめて公表するための下準備を行った。

(3)平成25年度は、平成24年度に行った考察に基づき、部分的に分解されたイディオムの各構成要素の意味が、イディオム全体の意味にどの程度貢献しているかに基づいた「分解可能性」という概念を援用しつつ、アドホック概念の「転嫁的用法」と「語彙的拡張」の観点から、イディオムの解釈プロセスについて分析を行った。

そして、岡田 聡宏・井門 亮 (2014)「省略語・イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』第12号, 1-29, 学習院大学外国語教育研究センター。にその研究成果をまとめた。

平成25年度の研究を通して、イディオム解釈には、コードモデルに基づく復号化に加え、語レベルと句レベルでのアドホック概念構築という推論プロセスがかかわっていることが明らかになった。どのレベルでアドホック概念が構築されるかについては、関連性理論で提案された解釈の手順によることとなるが、そのイディオムの分解可能性や、聞き手の側でのそのイディオムの新奇性の度合いなども影響を与えているものと思われる。さらに、イディオム解釈の際に構築されるアドホック概念については、申請当初に予想していた「拡張」されたものだけでなく、「転嫁的」に用いられるものもあることを明らかにした。

いずれのタイプのアドホック概念が構築されるにせよ、イディオムの解釈プロセスは、他の言語表現の解釈の場合と同様に、「関連性理論による解釈の手順」に従って進められる。つまり、最小の処理コストで十分な関連

性が得られるような解釈にたどり着くまで解釈が進められ、関連性の期待を満たすようなレベルに達した段階で、解釈が打ち切られることになるのである。なお、こういったイディオムの語用論的解釈については、今井邦彦（監訳）岡田 聡宏・井門 亮・松崎 由貴・古牧 久典（訳）(2014)『語用論キートン事典』東京：開拓社．における議論も参考にしたものである。

（４）本研究を通して、日・英語ともイディオムの解釈については、関連性理論におけるアドホック概念の観点から分析が可能であり、語彙的拡張や転嫁的用法といった語用論的な推論プロセスがかかわっていることが明らかになった。

しかし、その際に構築されるアドホック概念については、そのイディオムの「分解可能性」の度合いや、聞き手にとってのそのイディオムの新奇性の度合いによって、「句レベル」で適用される場合から「語レベル」で適用される場合まで、段階的なものになっていると思われる。つまり、これらの要因もアドホック概念に基づいたイディオムの解釈に影響を与えているのである。

（５）本研究は、これまで様々な言語表現の解釈に対して行われてきた分析と同様に、関連性の原理に沿った発話解釈分析の可能性をさらに広げるものになると考える。

さらに、アドホック概念構築という推論作業が、これまでの分析で明らかにされてきた「語レベル」での解釈のみに適用されるのではなく、イディオムといった「句レベル」での解釈にも適用できるということが明らかになり、理論的な可能性の拡大にも貢献することになると思われる。

また本研究を通して、語彙や句の解釈の仕組みに認知的な側面から光を当てることによって、人間がイディオムの解釈を行う際には、イディオムで用いられている符号化された概念についての知識を用いているだけでなく、様々な認知的能力や、言語的・非言語的知識も用いているということが明らかになった。

## 5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

岡田 聡宏、井門 亮、省略語・イディオム解釈とアドホック概念、言語・文化・社会、査読有、第12号、2014、1-29

井門 亮、イディオム解釈とアドホック概念、言語・文化・社会、査読有、第10号、2012、1-15

〔図書〕(計1件)

松島 正一(編)岡田 聡宏、井門 亮・他、

音羽書房鶴見書店、ヘルメスたちの饗宴  
英語英米文学論文集、2012、661-695

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

井門 亮 (IDO RYO)

群馬大学・社会情報学部・准教授

研究者番号：90334086